

2024年5月12日復活節第7主日（昇天後主日）説教

出エジプト記 28章 1-5、9-10、29-30 節
使徒言行録 1章 15-26 節
ヨハネによる福音書第 17章 11C~19 節

わたしたちの教会にとって、本日は子どもとともに捧げる聖餐式の日です。教会歴では、先週の木曜日が昇天日でしたので、本日は、復活節第7主日、また昇天後主日でもあります。来週は聖霊降臨日・ペンテコステです。この期間は、祈ることを改めて大切に作る期間ですが、聖霊降臨という出来事を改めて迎えるための準備の期間といえます。

本日の旧約日課、また使徒書である使徒言行録の個所には、準備の期間、すなわち「何かを備える」という主題が見出せます。出エジプト記の本日の箇所は、25章から始まる（小見出しでは「幕屋建設の指示」となっている）幕屋の建設に関する記述の一部です。幕屋とは、神殿と同じと考えてよいのですが、神様が臨在する場所、すなわち祭司たちによって主なる神様への犠牲をささげる祭儀が行われる場所です。言い換えると、主なる神様と人間との接点となる場所です。そのために、どのような道具、洋服、あるいは飾りなどの備えが必要か、それが詳細に記述されています。きわめて具体的な内容が書かれているのはそのためです。

同じように、使徒書である使徒言行録も、「何かを備える」という主題を見出すことができます。「ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、この務めと使徒職を継がせるためです」（使徒 1：25）とある通り、聖霊を受けて十二使徒としての活動を始めるために、使徒の欠員を補充するという備えをしているからです。

裏切りの代名詞となっているイスカエリオテのユダですが、その最後について、福音書の記述はそれぞれ異なっています。マルコによる福音書は、イスカエリオテのユダの最後について何も記していませんので、わたし個人としては、イスカエリオテのユダのみを裏切り者とするには反対なのですが、この世界からいなくなってしまったようですので、補う必要はあります。補充するための候補となる人物の条件は、「主イエスが私たちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始めて、私たちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者のうちの誰か一人」（使徒 1：21-22）というものです。新共同訳と聖書協会共同訳は「いつも一緒」と訳していますが、直訳すれば、「すべての時において」となります。口語訳では「終始」となっていたので、直訳に近いかもしれません。すべての時においてと考えますと、弟子たちは、みんな、いつもイエス様と一緒にはいなかったではないか、最後にはみんな逃げたのではないかと考えてしまいますが、使徒たちはいつもいたという前提で選択がなされます。この条件はかなり厳しいといえ、候補となる人数もかなり限られると思います。使徒言行録でのちに使徒と呼ばれるパウロも、この条件を全く満たしていません。そのような疑問を残しつつも、使徒が決められるのですが、その決め方が聖書的です。祈りとくじ引きで決めるからです。

祈ったのは良いが、くじ引きとかと違ってしまいますが、それはわたしたちが、何かを選ぶ時、多数決という方法に慣れているからです。もちろん、現代

は、多数決ではなく、むしろ逆に少数者の意見だから採用するという現象もありますが、それらは理性的であると同時に、人間の思いの集大成です。くじ引きがなぜ聖書的なのか、それは人間の思いを排除して何かを決めるために、『聖書』においてよくおこなわれる方法であるからです（レビ 16：9、民数 26：55、ヨシュア 13：6、サム上 10：20 など）。いずれにしても、こうして、祈り、人間の思いを排してくじを引き、使徒の補充も完了し、聖霊が下ることを通して、イエス様の弟子たち、すなわち教会の新しい歩みが始まるのです。

旧約日課と使徒書（使徒言行録）から、「備えること」について触れてきましたが、大切なのは、「何を準備するか」ではなく、「何のために準備するか」です。旧約日課における備えは、幕屋で祭儀をするためです。使徒言行録にある備えは、「**主の復活の証人になる**」ためです。使徒の定数が足りないからではなく、復活の証人が必要だからです。幕屋における祭儀、そして、復活の証人、これらは共通性がないように思えますが、主なる神様の「栄光」を示すという点で共通しています。幕屋とは、祭儀を通して主なる神様が臨在され、その栄光を示す場所であるからです。また、イエス様の復活にこそ、主なる神様の「栄光」がもっともはっきりと表れるからです。

本日の福音書であるヨハネによる福音書の箇所には、「栄光」という言葉はありませんが、福音書もこの「栄光」という言葉で結び付けられます。本日の箇所が含まれている 17 章は、イエス様が受難を前に祈る個所であり、その最初でイエス様は、「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子に栄光を現してください」とあります（ヨハネ 17：1）。また、中ほどには「私のものはすべてあなたのもの、あなたのものは私のものです。私は彼らによって栄光を受けました。」（ヨハネ 17：10）、最後のほうには「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子に栄光を現してください。」（ヨハネ 17：22）とあり、「栄光」という言葉が全体を貫いています。

ヨハネ福音書の物語において、イエス様は地上で主なる神様の栄光を現して来たのですが、今、天地創造の前にイエス様が持っていた栄光を、最後に現す時が来たとして 17 章では祈っています。十字架は終わりではなく主なる神様の栄光を現す時であるからです。「栄光」という言葉は、ヘブル語で語源的に「重さ、重しとする」という意味があります。イエス様は生涯を通じて、「何を重しとするか」を示し、幕屋を造る意味も、使徒を補う意味も、「何を重しとするか」ということにかかわっているのです。

本日の箇所では、「**聖なる父よ、私に与えてくださった御名によって彼らを守ってください**」（ヨハネ 17：11）と弟子たちのために祈っています。17 章 20 節以降が弟子たちの後に続く教会の人々のための、イエス様の祈りといえますが、本日の箇所も、聖霊降臨を前にして、備えをしようとしているわたしたちにとっては、わたしたちのために 2024 年の今も、イエス様が祈ってくださっているととらえてよいのです。

わたしたちがそのイエス様の名によって集められ、礼拝をささげるのは、主なる神様の栄光を現すためです。主なる神様の栄光は、本当の平和がなんであるかを示します。様々な事柄が起こる現代ですが、その平和から、わたしたちは集団として、また個人としても慰めと励ましを得ます。わたしたちは、これからも礼拝を通して臨在されるイエス様によって、主なる神様の栄光を示し続けたいと思います。